

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 17 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520114

研究課題名(和文) フランシスコ会の美術 - 「聖霊」と「聖霊派」の図像について

研究課題名(英文) Franciscan Art: Iconography of the Holy Spirit and of Spiritual Franciscans

## 研究代表者

谷古宇 尚 (Yakou, Hisashi)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：60322872

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は主に13・14世紀のイタリアにおけるフランシスコ会の美術を対象とし、創立から間もないこの修道会の穏健派と厳格派・聖霊派の対立を視野に入れながら作品を考察するものである。後者の思想は強く終末論的な色合いを帯び、「最後の審判」や「天上の栄光」あるいはフランシスコ会士の宣教や殉教の場面などに影響を与えたと考えられる。一方、絵画が公の場に置かれているかぎり、教会の正統的な教義をも反映しているはずである。アッシジ、シエナ、ナポリ、パドヴァ、フィデンツァに残される作品を、この二つの側面から解明した。

研究成果の概要(英文)：In this research, paintings from the 13th and 14th centuries, all remaining in Assisi, Siena, Naples, Padua, and Fidenza and related to St. Francis of Assisi and the Franciscan Order, are analyzed to illustrate the extent to which Observants' or extreme Spirituals' thoughts affected the iconography of the Last Judgment and glory of Heaven, as well as Franciscan missionary and martyrdom scenes. Since the paintings are also shown to have revealed the Church's orthodoxy when exhibited in public places, both aspects should be considered in understanding the paintings amid their historical backgrounds.

研究分野：美術史

キーワード：最後の審判 黙示録 宣教 殉教

## 1. 研究開始当初の背景

(1) フランシスコ会の初期の歴史において、創立者アッシジの聖フランチェスコの理想主義的な立場を厳格に遵守しようとする修道士たちは、オッセルヴァンティ(会則厳守派=厳格派)あるいはスピリトゥアーリ(聖霊派)と呼ばれている。それは、フィオーレのヨアキムが紀元1260年から始まると予言していた歴史の第三段階を担う「霊的な人々」であると自らをみなしていたからである。このことは彼らを、キリストを見知っていた直接の弟子たちと結びつける。神(の子)であるキリストを見知り、自分自身のうちに神(聖霊)を見出す。キリストの弟子たちのこうした経験を、第二のキリストである聖フランチェスコに忠実に従おうとする修道士たちは繰り返したのである。

フランシスコ会による中世教会の霊性の刷新とは、端的にはこのような新たな神(キリスト・聖霊)の経験を指していると考えられる。これにより現実の教会=聖堂は、再びキリストの秘跡的現存の場となる。そしてキリストの臨在を確信するオプティミスティックな「終末」観が支配する。物理的に聖堂を構成する美術(建築・絵画・彫刻など)は、この変化をどのように受け止めたかが検討されるべきであろう。

(2) これまで、Dieter Blume, *Wandmalerei als Ordenspropaganda: Bildprogramme im Chorbereich franziskanischer Konvente Italiens bis zur Mitte des 14. Jahrhunderts*, Worms, 1983. や Chiara Frugoni, *Francesco e l'invenzione delle stimmate*, Torino, 1993. などの著作は、ともすれば異端として排除されかねなかったフランシスコ会が、いかに教会制度と共犯関係のうちに聖人と修道会のプロパガンダを行ってきたかを、美術作品を通して検証している。これらの詳細な研究が、フランシスコ会の美術を理解するために大きな貢献をしたことは確かである。

しかし、こうした研究に取り上げられることのほとんどなかった南イタリア、特にナポリのいくつかのフランシスコ会修道院を調査してみれば、上述したフランシスコ会による霊性の刷新の大きな一面が見過ごされてきたことに気づかされる。絵画作品との関連でいえば、「至福直観」や終末論的な文脈の中で理解されるべき「慈愛の業」を描く図像が重要でありながら、そうした指摘は少なかったのである。

## 2. 研究の目的

(1) 終末論と美術に関しては、イヴ・クリストの優れた著作がある(Yves Christe, *L'Apocalypse de Jean*, Paris, 1996; id., *Jugements derniers*, Saint-Léger-Vauban, 1999.)。しかしフランシスコ会との関係はごく一部で触れられているに過ぎず、多くの作

例が考察から漏れているといえる。

本研究は、このようなこれまでの図像研究を踏まえて、おもにイタリアのフランシスコ会修道院・聖堂の建築と絵画図像を「聖霊」そして終末論とのかかわりの中で検討することを通して、フランシスコ会の美術に対する新しい観点を得ようとするものである。

(2) アッシジの聖フランチェスコ聖堂では、ファサードに黙示録の四つの生き物がバラ窓の周りに配置され、下院の祭壇上部の穹窿天井にはやはり黙示録のモチーフが描かれている。このようにフランシスコ会修道院に挿入される黙示録に典拠をもつ図像を集め、それぞれの作例が置かれる装飾プログラム全体の中での意味を考察する。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は、おもにイタリアで現地調査(修道院・聖堂での写真撮影や図面作成、文化財監督局や古文書館での文書調査、写真資料調査など)を行ったうえで、美術史関係の研究所で二次文献やデータベースを用いて調査結果をまとめ、理論的な考察を行うものである。

(2) 具体的な調査地としては、いずれもイタリアにあるナポリのサンタ・キアラ修道院、シエナのサン・フランチェスコ修道院、フィデンツァ大聖堂などが挙げられる。また文献調査は、フィレンツェにあるドイツ美術史研究所やローマのヘルツィアーナ図書館で行う。

## 4. 研究成果

(1) アッシジの聖フランチェスコがもともと抱いていた宣教についての考え方が、フランシスコ会内部の厳格派・聖霊派においてよく保たれていたと想定し、フランチェスコ自身やフランシスコ会士の宣教に関する図像の調査を行った。

シエナやパドヴァなどに描かれる殉教場面が、実際に起きた事件をもとに創案された新しい図像であり、当時の東西交流の状況を踏まえた上で解釈すべきであることを、論文にまとめイタリアの学術専門誌に発表した。そこでは中世末に、聖遺物と視覚イメージが相補的な関係にあったこと、また当時初めて中国までヨーロッパ人が到達し、キリスト教の宣教が行われた時代的文脈の重要性を指摘した。

ヨーロッパとアジアとの関係のあり方は、16世紀以降の大航海時代以降とは大きく異なり、キリスト教図像を考察する際には、つねにこれを念頭に置く必要がある。13~14世紀にフランシスコ会の修道院が複数あったことが知られる中国福建省の泉州には、フランシスコ会士で当地の司教であったアンドレア・ダ・ペルージャの墓碑も残されている。こうしたキリスト教徒の墓碑の造形的な特

徴の分析も行った。

(2) 他に、宣教の図像に関して「火の試練」の調査を行った。この場面は、フランシスコ会の厳格派・聖霊派が重要な役割を担った宣教について考察するきっかけとなる。結論としては、13～15世紀に描かれた「火の試練」は、異教徒との対立が強調されており、聖フランチェスコの福音を伝え、平和をもたらす精神を反映するものではないこと、また「フランシスコ会士の殉教」場面に表現されているような、宣教に赴く修道士に勧められた従順な姿勢を見てとることは難しいことが導き出された。

(3) ナポリのサンタ・キアラ修道院やサンタ・マリア・ドンナレジーナ修道院は、14世紀前半にフランシスコ会聖霊派との関係が深かった。そこには多くの絵画装飾が残されており、聖霊派の思想と美術とのかわり合いを考える上で、様々な手掛かりを与えてくれる。特に「黙示録」や「最後の審判」の図像は、フィオーレのヨアキムの影響を受けた終末論としばしば結び付けられるが、ボナヴェントゥーラによって定式化されたフランシスコ会穏健派（主流派）の歴史哲学とは、対比的にとらえることができるだろう。

後者の「キリスト中心主義」と呼びうる思想は、フランシスコ会の母寺と言えるがアッシジのサン・フランチェスコ聖堂の装飾の中に見出すことができる。それは聖フランチェスコを介した「キリスト中心主義」であるが、教会の正統的な教義である。アッシジと対比されるナポリの作例が、より聖霊派的であると言いつるのか検討を行った。

(4) イタリア北部の町フィデンツァの大聖堂（17世紀まで参事会付聖堂）は、ロマネスクからゴシック期にかけて建造されたものであるが、その建築と彫刻はイタリア美術史上、主要な作品の一つに数えられる。しかし内陣の壁面に残される13世紀半ばに制作されたと考えられる壁画について、これまでほとんど研究されてこなかった。フランシスコ会の厳格派・聖霊派と美術の関係を考察する本研究において、その特異な図像は注目すべきである。

初期キリスト教期以来、内陣のアプシスを覆う四分の一球面状の壁面には、通常「天上の栄光」が置かれるのが普通であった。フィデンツァ大聖堂では、そのゴシック的な建築形態から、四分の一球面ではなく半円のカーブを成す壁面に絵画が描かれている。いずれにしても、そこには「最後の審判」が置かれている点で注目される。聖堂でもっとも重要なこの場所に「最後の審判」が表わされる最初期の例と考えられる。

フィデンツァでは、中央に審判者キリストが座し、聖フランチェスコが書物を右手で高く掲げながら立ち会っている。「最後の審判」

はファサード裏壁面に置かれるのが普通であり、内陣には「天上の栄光」か、審判とは区別されるべき黙示録の場景が描かれるのがふさわしい。

フィデンツァの図像は、二通りに解釈される可能性がある。一つは、フィオーレのヨアキムの思想内容を、この画像は肯定的にとらえているとする解釈。1260年から新しい「聖霊の時代」が始まり、霊的な修道士たちが優位を占めるようになるというヨアキムの見解は、時間の展開とその終わりを強調する「最後の審判」の図像がより適合する。1254年にフィデンツァ出身のゲラルド・ダ・ボルゴ・サン・ドンニオーはヨアキムの著述に註解を加えたが、すぐさま教皇庁によって異端と断罪された。時期と場所の符合もこの解釈を支持しそうである。しかしながらフランチェスコの持つ聖書は、教会の正統的な教義、すなわちキリストの十字架上の死による救いの業の成就を示そうとしているとも考えられる。

この対立する二つの解釈のうち、自治的な都市の参事会付聖堂の内陣という場所の重要性を考慮に入れるならば、やはり後者が妥当と考えられる。当然のことではあるが、原則的に正統的な教義が装飾プログラムのもとにあるという考え方は、アッシジのサン・フランチェスコ聖堂やナポリのフランシスコ会の女子修道院聖堂だけでなく、黙示録にモチーフをとる中世後期の図像を広く再考する出発点となるものである。

(5) (4)の成果を受けて、アッシジにあるサン・フランチェスコ聖堂の図像について包括的に検討した。同聖堂はフランシスコ会の母寺であり、その図像は他の場所での絵画装飾の規範として働いたと考えられる。特に取り上げたのは、聖堂上院の「旧・新約伝」「聖フランチェスコ伝」「黙示録」「四大教父」「四福音書記者」、下院の「聖フランチェスコの栄光とフランシスコ会の三つの徳」と17世紀に「天上の栄光」から描き替えられた「最後の審判」である。

明らかにされたのはこの聖堂において、キリストの受難と復活により救いの計画は成就したという教会の正統的な信仰が表わされている点、またそれと密接に関連することだが、上院と下院に見られる「黙示録」の場面やモチーフは、善によって悪が克服された状態を示そうとしている点、すなわち悪が凌駕する終末の破滅的な様相や、最後の審判の懲罰的な側面を描き出そうとしているのではないことである。

キリスト教の時間観あるいは歴史哲学における二つの異なった様相、すなわち初めの時から終わりの時までを一直線的に捉える見方と、キリストの受難と復活によって神の救いの計画としての時間の流れは完結したものともみる見方とを、それぞれ「最後の審判」と「天上の栄光」の図像に結び付けて考察す

る方法が有効であるといえる。その際「黙示録」をどのように理解するかが鍵となる。繰り返すならば、「黙示録」を終末の破滅的な情景を伝えるものとして受け取るか、あるいはそれを乗り越える善の比喻として解釈するかであり、こうした観点から「黙示録」図像をより多くの作例に基づいて分析する必要があるだろう。

(6) ナポリのフランシスコ会の女子修道院に付属していたサンタ・マリア・ドンナレジーナ聖堂では、ロッフレード礼拝堂の入口周辺の壁面に「黙示録」の断片が残されている。これは、ナポリに由来するシュトゥットガルトの州立美術館所蔵の2枚の「黙示録」板絵と、様式的・図像的に結び付けられる。これらの作例は、聖書の記述の流れに従った物語的な連続描写というよりは、「黙示録」に書かれる様々なヴィジョンを一挙に提示するような画面構成となっている。すなわち、時間的な推移を感じさせるようなものではなく、「黙示録」のメッセージを統合的に伝えるものとなっている点が重要である。それにより、ナポリの「黙示録」は終わりの時の破滅的な状況を描写するのではなく、悪の凌駕される様相を総体的に表そうとしていると理解されるのである。フランシスコ会の母寺であるアッシジのサン・フランチェスコ聖堂上院の左翼廊にも「黙示録」場面が描かれているが、これも同様の文脈で理解されるべきものと考えられる。

フランシスコ会に関わるフィデンツァとナポリの作例が、終末論の二つの対比的な側面を表していることが明らかになるのである。

(7) (3)で取り上げられたフィデンツァ大聖堂のアプシス壁面の図像は、これまで研究者によって言及されることが少なく、制作年代についても漠然と1280年頃のものとしてきた。しかしながら他のフィデンツァ周辺の地域(エミリア地方)の絵画と様式的な比較をすることにより、また当時のフィデンツァの政治的状況から1260年前後に位置づけられる。この年代は、フランシスコ会内部の正統派の教義とヨアキム主義的な思想との対立を反映すると考えられる聖フランチェスコ像が描き込まれる時期としてもふさわしい。なぜなら、ヨアキム主義者でフィデンツァ出身のフランシスコ会士、ゲラルド・ダ・ボルゴ・サン・ドンニョがその異端的な著作により弾劾され放逐されるのがまさにこの頃なのである。

(8) フィデンツァにはもう一点、フランシスコ会とかわる図像が残されている。もともと大聖堂のクリプタのそばに描かれたフランシスコ会士を伴う船の難破の場面である。14世紀初めに描かれたと考えられるこの作品を手がかりに、宣教を使命とした同修道会

の中国にまでおよぶ活動と美術作品とのかわりを考察した。とくに海がいかにかに表象されたかに注目し、経験する世界が格段に拡張しながらも、絵画表現への影響はやや限定的なものにとどまることを明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

Hisashi Yakou, "The Last Judgment in the Cathedral of Fidenza and the Eschatological Images in the Franciscan Context", in: Beth Mulvaney & Bradley R. Franco (eds.), *The World of Saint Francis of Assisi*, Siena: Betti Editrice, 2016, 印刷中, 査読有.

Hisashi Yakou, "La rappresentazione del mare nell'arte francescana," *Hortus Artium Medievalium*, 22, 2016, 印刷中, 査読有.

Hisashi Yakou, "Il martirio e la missione francescana in Asia nell'arte italiana del primo Trecento," *Il Santo*, LI (n. 2-3), 2011, pp. 465-474, 査読有.

[学会発表](計 7件)

Hisashi Yakou, "Franciscan and the Sea," paper presented at International Conference "Expanding the Frontiers of the Mediterranean" 20<sup>th</sup> Anniversary of the Foundation of Institute for Mediterranean Studies (ICIMS) Busan University of Foreign Studies, 2016年3月25日, 釜山(大韓民国).

Hisashi Yakou, "The Proof of Fire: an Iconography of Conflict or Hybridity?", paper presented at International Conference "Intercultural Hybridity in Mediterranean Civilizations", organized by Institute for Mediterranean Studies of Busan University of Foreign Studies and Mediterranean Institute of University of Malta, 2014年1月24日, 釜山(大韓民国).

Hisashi Yakou, "La presenza di San Francesco d'Assisi nel duomo di Fidenza", paper presented at the conference "Romanico e Gotico del Duomo di Fidenza" organized by Comune di Fidenza, 2012年12月15日, フィデンツァ(イタリア).

6 . 研究組織

(1)研究代表者

谷古宇 尚 (YAKOU, Hisashi)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：6 0 3 2 2 8 7 2